

国語教科書における読点の実態(二)

——三社の比較を通して——

清田朗裕

一 はじめに

本稿は、清田朗裕(二〇一九)(以下、「前稿」と呼ぶ)の追跡調査を行ったものである。前稿では、教科書会社二社の読点使用例を調査し、その実態を明らかにした。前稿の結論を述べると、以下の通りである。

I 「は」に読点が打たれているのは、主題を表す場合である。主題を表すのにもかわらず、読点が打たれていない場合は、該当する文が何等かの表現意図や表現技法が認められる場合である。

II 「が」に読点が打たれているのは、主に他動詞文においてである。自動詞文には打たれていない。ただし、「を」

と共に起す場合には、打たれている。他動詞文にもかかわらず、読点が打たれていない場合は、語順の移動や何等かの表現意図や表現技法が認められる場合である。

III 「を」に読点が打たれているのは、述語が隣接していない場合である。述語が隣接していないのにもかわらず、読点が打たれていない場合は、何等かの表現意図や表現技法が認められる場合である。

IV 「に」に読点が打たれているのは、基本的に、文の焦点となる新情報を表す場合である。ただし、新情報を表す場合であっても、述語と隣接している場合は、読点は打たれていない。また、述語と隣接していないのにもかわらず、読点が打たれていないのは、「に」を「の」に変換し、直後の名詞と名詞句を成す場合である。

(清田二〇一九)

本稿では、教科書会社二社分のデータを追加し、合計三社の入門期国語教科書の実態を調査した結果を示す。概ね前稿と等しい結果が認められたため、結論を大幅に変更する必要はないと考えているが、各社毎の特徴を見出すことができたため、指摘したい。なお、読点の問題点や学習指導要領の内容は、前稿ですでに述べているため、そちらを参照されたい。

二 調査資料

本稿では、以下の入門期国語教科書を取り上げる。

- ・『こくご 一上かざぐるま』（光村図書）
- ・『新編あたらしいこくご 一上』（東京書籍）
- ・『ひろがることば しょうがくこくご 一上』（教育出版）

なお、前稿では平成十八年発行の光村図書を資料として取り上げたが、本稿では、他二社の検定期と整合性を取るために、平成二十六年検定済のものを使用し、再調査を行っている。したがって、前稿のデータとは異なる。

三 調査方法

前稿と同様、調査資料に見える、標題を除いたすべての助詞の用例を採集する。その後、助詞の直後に読点が打たれている例を教科書毎に整理する。助詞の分類は、学校教育に資するため、基本的に学校文法の枠組みで取り上げる。

四 調査結果

四・一 全体の用例数

前稿に引き続き、本稿も、読点が打たれた助詞のみ取り上げる。調査結果を表一～表三に示す。

表一は、光村図書にみられる読点の例である。

格助詞は、「が」「を」「に」「で」「と」「や」、副助詞は、

「は」「も」「か」「なんか」、接続助詞は、「が」「たり」「て（で）」「と」「ので」、「は」を伴い複合助詞となったものには、「には」がみられた。

表二は、東京書籍にみられる読点の例である。

格助詞は、「が」「を」「に」「で」「と」「から」「や」、副助

詞は、「は」「も」「まで」、接続助詞は、「たり（だり）」「て（で）」「と」「ながら」、終助詞は、「な」「は」を伴い複合助

表一 助詞出現数と読点の関係(光村図書)

読点割合 (%)	読点有	総出現数	助詞	品詞
18.6	18	97	が	
4.5	5	112	を	
14.8	9	61	に	格助詞
23.5	4	17	で	
17.9	5	28	と	
50.0	1	2	や	
68.6	48	70	は	
21.4	3	14	も	副助詞
12.5	2	16	か	
100.0	1	1	なんか	
66.7	2	3	が	
50.0	1	2	たり	接続助詞
33.7	35	104	て(で)	
95.5	21	22	と	終助詞
100.0	1	1	ので	
83.3	5	6	には	複数
29.0	161	556		計

表三 助詞出現数と読点の関係(教育出版)

読点割合 (%)	読点有	総出現数	助詞	品詞
27.3	24	88	が	
2.1	3	141	を	
21.3	10	47	に	格助詞
23.1	3	13	で	
25.0	2	8	から	
50.0	8	16	と	
20.0	2	10	や	
93.5	58	62	は	副助詞
50.0	2	4	か	
100.0	1	1	けれど	
60.0	3	5	(たら)	接続助詞
25.0	1	4	たり	
32.3	30	93	て(で)	
100.0	5	5	と	
100.0	3	3	ので	
100.0	1	1	だけが	
100.0	1	1	ては	複数
100.0	2	2	では	
100.0	2	2	には	
31.8	161	506		計

表二 助詞出現数と読点の関係(東京書籍)

読点割合 (%)	読点有	総出現数	助詞	品詞
9.3	8	86	が	
3.1	4	129	を	
12.2	6	49	に	格助詞
38.5	5	13	で	
19.4	7	36	と	
36.4	4	11	から	
100.0	3	3	や	
75.0	63	84	は	副助詞
36.4	4	11	も	
100.0	1	1	まで	
100.0	3	3	たり(だり)	接続助詞
64.8	46	71	て(で)	
85.7	6	7	と	
75.0	3	4	ながら	
100.0	1	1	な	終助詞
100.0	1	1	からは	複数
100.0	3	3	には	
32.7	168	513		計

表四 読点が付いた助詞の例がある教科書数の比較

1社	2社	3社	品詞
	から	が	
		を	
		に	格助詞
		で	
		と	
		や	
なんか	か	は	副助詞
まで	も		
が	ので	たり	接続助詞
けれど		て(で)	
(たら)		と	
ながら			
な			終助詞
からは		には	複合助詞
だけが			
ては			
では			

詞となったものには、「からは」「には」がみられた。

表三は、教育出版にみられる読点の例である。

格助詞は、「が」「を」「に」「で」「から」「と」「や」、副助

詞は、「は」「か」、接続助詞は、「けれど」「(たら)」「たり」

「て(で)」「と」「ので」「が」を伴い複合助詞となったもの
には、「だけが」、「は」を伴い複合助詞となったものには、

「ては」「では」「には」がみられた。

四・二 読点が打たれた例がある教科書会社数

次に、三社で読点が打たれた例がある助詞、二社で読点が打たれた例がある助詞、一社のみ読点が打たれた例がある助詞に分ける(表四)。

三社すべてに読点が打たれた例がある格助詞は、「が」「を」「に」「で」「と」「や」、副助詞は、「は」、接続助詞は、「たり」「て(で)」「と」、終助詞は、無し、複合助詞は「には」という結果だった。

二社に読点が打たれた例がある格助詞は、「から」、副助詞は「か」「も」、接続助詞は、「ので」、終助詞と複合助詞は無し、という結果だった。

一社にのみ、読点が打たれた例がある格助詞は、無し、副助詞は、「なんか」「まで」、接続助詞は、「が」「けれど」「(たら)」「ながら」、終助詞は、「な」、複合助詞は、「からは」「だ

けが」「ては」「では」という結果だった。

五 考察

前節までに、三社の教科書にみえる助詞に打たれた読点の種類と用例数を確認した。

本節では、前稿でも検討した、日本語において最も基本的な格助詞「が」「を」「に」と副助詞「は」の量的分布を、今度三社間で比較し、その傾向を示し、そこから東京書籍と教育出版の特徴を指摘したい。

まず、東京書籍の特徴について指摘する。

表一〜表三で示した「が」「を」「に」「は」の総出現数と読点が打たれた割合を抜き出すと、表五のようになる。

一見して分かるのは、三社ともに、同程度の総出現数である、ということである。

たしかに、調査資料の総頁数を調べてみると、光村図書一三二頁、東京書籍一三六頁、教育出版一三二頁と、同程度の分量である。とはいえ、表現面においても、同じ傾向が見られるのは興味深い。

ただし、異なりも確認できる。それぞれの割合を比較すると、東京書籍は、ここで挙げた助詞については、全体的に読点を打たない場合が多いようである。例えば、「が」について

表五 「が」「に」「は」の用例数と割合

を			が			
割合 (%)	読点有	総出現数	割合 (%)	読点有	総出現数	
4.5	5	112	18.6	18	97	光村図書
3.1	4	129	9.3	8	86	東京書籍
2.1	3	141	27.3	24	88	教育出版
3.2	4.0	127.3	18.4	16.7	90.3	平均
は			に			
割合 (%)	読点有	総出現数	割合 (%)	読点有	総出現数	
68.6	48	70	14.8	9	61	光村図書
75.0	63	84	12.2	6	49	東京書籍
93.5	58	62	21.3	10	47	教育出版
79.0	56.3	72.0	16.1	8.3	52.3	平均

は、総出現数八六例中読点有八例で、全体の九・三%である。他二社が、読点有の例が二〇例程度であることから、相対的に低いといえる。「に」についても同様で、総出現数四九例中読点有六例で、全体の二・二%である。他二社が、読点有の例が十例前後あることから、相対的に低いといえる。

とはいえ、表二に示した東京書籍の読点有全体の用例数は、一六八例であり、実は、三社間で最も多い。そこで、表二を詳しくみると、接続助詞「て(で)」は、総出現数七一例中読

点有四六例で六四・八%を示しており、突出していることがわかる。他二社の「て(で)」では、読点有の例は、光村図書総出現数一〇四例中読点有三五例で三三・七%、教育出版総出現数九三例中読点有三〇例で三二・三%と約三〇%であるから、総出現数自体は、最も少ないのに対し、読点有は約一・五倍、割合では約二倍の差を認めることができる。

では、この差は、どのように捉えることができるだろうか。もちろん、作品の差もあるだろう。だが、「て(で)」自体は、他二社にも一定数の用例を認めることができるにも関わらず、割合に大きな違いがあることを考えると、やはり東京書籍の一つの特徴と捉えてよいだろう。

改めて表二をみると、「て(で)」が含まれる接続助詞すべての読点有の例が五〇%以上である。だとすると、東京書籍は、複文中の区切りを明確に示す傾向がある、と整理できそうである。

次に、教育出版には、どのような特徴があるだろうか。表三を見て、まず気づくのは、他二社に比べ、多様な助詞に読点有が打たれているということである。一九種類の助詞に読点有が打たれている(例えば「へ」には一例も読点有が打たれていない)もあるので、読点有の例の種類だけで判断できるわけではないが、多様な表現に読点有が用いられているということは、指摘できるだろう。特に、

「だけが」「ては」「では」といった複合助詞の例は、他二社には見られないものである。そこで次に、「は」の用例に目を向けると、総用例数こそ六二例と最も少ないものの、読点有五八例と、九三・五%の割合で読点が打たれている。「は」は、主題を表す助詞であることから、教育出版の場合、「は」の下には読点を打つことが基本になっていると考えられる。

それでは、読点が打たれていない四例の「は」は、どのような例であろうか。以下に示す。

(一) それでも、かぶは ぬけません。(八三頁)

(二) やっと、かぶは ぬけました。(八六頁)

(三) つぎは だれに とまるでしようか。(一一二頁)

(四) ちょっと しんばいしたけれど、がっこうは とても

たのしそうです。(一一二頁)

ただし、(一)、(二)の例は、他二社にも掲載されている「おおきなかぶ」からの例である(光村図書のみ翻訳者が異なるが、該当箇所の「は」については読点が打たれておらず、結果的に同じである)。そのためこの二例を除外すると、(三)、(四)の「ふろく ほんをよもう」の中に見える例が残る。つまり、中心的な内容部分に見える「は」には、すべて読点が打たれていることになる。

ここからも、教育出版は、主題の「は」に読点を打つことを意識していると考えられる。

おわりに

本稿では、教科書会社三社の入門期国語教科書を比較し、用例数とその割合の観点から、読点の実態について取り上げた。

ここでは、三社の教科書全体の総頁数が同程度であることと相関するように、総出現数も同程度であるという共通点を見出すことができた。

一方で、特徴的な違いも認められた。

東京書籍では、接続助詞「て(で)」の使用状況が他二社と大きく異なり、そこから、複文の前件と後件を明確に区別ろうとする意識を読み取ることができた。

教育出版では、「は」には、ほぼ読点が打たれていることから、主題を明確に示す意識を読み取ることができた。

一般に、「日本語には正書法がない」と言われる。

確かに、日本語の実態に即した言説であるが、本調査でみてきたように、テキスト毎に特徴があるという、至極当たり前のことも認めなければならない。

つまり、日本語には、厳密な規則としての正書法はないにしても、個々のテキストには、独自のルールに基づいた読点

の打ち方に関する方略が、ある程度認められる、ということである。

だとすれば、一つ一つのテキストにおいては、どのような規準で読点が打たれているかを探っていくことも、読点指導を行う際の重要な言語活動の一つになるであろう。

学校現場において、「知識及び技能」で扱われる項目については、「取り立て指導」が行われることが多く、文部科学省（二〇一八）でも推奨されている。だが、そこで身につけた「知識及び技能」は、実際のテキストを読み深めていく際に役に立たなければ、結局、その場限りの指導に留まってしまふ。これまで以上に言語活動を重視する新学習指導要領を踏まえると、読点指導を含む「知識及び技能」についても、その場限りで終わらない様々な言語活動を考えていく必要がある、その教材開発が求められる。

筆者は、読点指導の一環として、読点の打ち方が異なる複数の文章を比較してその特徴を探るといふ言語活動が、有効な手立ての一つになるのではないかと考えているが、具体的な検討、教材化については、今後の課題としたい。

参考文献

清田朗裕（二〇一九）「国語教科書における読点の実態―小学校第

一学年を対象にして―」『国語国文研究と教育』五七、熊本大学教育学部国文学会

文部科学省（二〇一八）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解

説国語編』（東洋館出版）

（きよた・あきひろ 大阪教育大学特任教授）

【終刊に寄せて】

—

私の処女論文は、清田朗裕（二〇〇八）『源氏物語』の地の文にみえるカ系列指示詞について―カノN・ソノNの対照から―』『国語国文 研究と教育』（四六号）というものです。中古語のソノNと、カノNを比較したもので、日本語文法学会で発表し、修士論文の一部となった内容を纏めたものでした。現在であれば、「日本語歴史コーパス」というコーパス資料がありますので、短時間で、より詳細に整理できる内容なのですが、当時は地道に用例を拾い、整理しました。結論もシンプルで、内容自体は拙いのですが、コーパスができる前に取り組んだため、結果として、コーパス以前の研究として取り上げられることがあり、私のこれまでの論文の中で一番（といっても一桁台ですが）引用されていると思います。

右の拙論を含め、『国語国文 研究と教育』には、計四本掲

載させていただきました。原稿の遅れから、執筆の度に（今回も）神野先生にご迷惑をおかけしてしまいました。大変申し訳なく思いますと共に、執筆意欲を促していただき、感謝申し上げます。

二

現在、私は、大阪教育大学で、研究と教育に携わっており、国語科で学んでいた日々のことを学生に話すことがあります。当時は（も）不勉強な身で、堀畑先生ご担当の「国語学概説Ⅱ」では、お情けで「可」を出していただきました。これが、私の国語科関係科目で唯一の可です。

現在、その国語学（日本語学）を専門とし、学生に講じていることに、因縁を感じます。

三

『国語国文 研究と教育』という雑誌名には、並列表現の「と」が用いられています。「と」の前後を入れ替えても同じ意味を表す言語表現です。

私はここに、「研究」と「教育」とは、同列に扱うものだ、という意志が込められていると解釈しています。研究だけでも、教育だけでもよくない。研究成果は教育に生かし、教育成果は研究に生かす。なかなか実践できておりませんが、戒

めとして度々思い出しています。

この度、『国語国文 研究と教育』自体は終刊となりましたが、国語科で学んできたことは、何かの機会毎に振り返り、次へと生かしながら、今後の教員生活を送って参りたいと思っています。

（了）